

Creative Ageing

ずっとび

Creative Ageing ずっとび
2021.4 → 2023.3 活動報告書

超高齢社会における 美術館のグローバルな 潮流とその背景

稲庭 彩和子

独立行政法人国立美術館

国立アートリサーチセンター 主任研究員

*2011-2021年度まで都美学芸員アート・コミュニケーション係長

「高齢社会に対応したプログラムがあれば視察したい」

そうした問い合わせが海外から東京都美術館(以下、都美)に来るようになったのは、10年前にアート・コミュニケーション事業が開始してまもなくの頃でした。超高齢社会を世界で最も早く経験している国の首都である東京都の美術館ならば、高齢社会に対応したプログラムを何かしているだろう…と期待をされたのかもしれませんが。

都美の来館者は60代以上が一定数を占めることもあり、アート・コミュニケーション事業では、学校教育やファミリー層への働きかけが先行して行われてきました。しかし、21世紀に入り高齢社会が進展し、世代間のギャップが深まり、文化の共同的体験が薄くなる中で、美術館は人々をつなぐ積極的な役割が求められるようになり、超高齢社会に対応したプログラムへの関心も高まってきたのです。

その潮流の端緒として、2007年にニューヨーク近代美術館(MoMA)で始まったアルツハイマー・プロジェクトがよく知られています。認知症の方とその家族や介護者を対象に、医療や福祉関係者とも連携して企画されたプロジェクトは関係者に大きなインパクトを与えました。美術館のエデュケーターが進行する対話型ギャラリー・プログラム「Meet Me at MoMA(モマで会いましょう)」は毎月開催され、つづいてニューヨークのメトロポリタン美術館(Met)でも同様の趣旨のプログラム「Met Escapes(メットでエスケープ)」が始まりました。

私は2011年にこれらのプログラムに参加し、他にはないユニークさと創造性を兼ね備えた社会参加の場に感心し、今後日本でも関心が高まることを確信しました。丁度同じ頃、都美のリニューアルに際した展覧会準備のために、メトロポリタン美術館で長期滞在調査をしていた中原淳行学芸員も、この種のプログラムの鮮烈な印象を帰国後に熱く語って

いました。「参加していた認知症の方の、プログラムを経て大きく変化したその表情が忘れられない、いつか都美でもそんなプログラムが実現できたら」と。

都美ではリニューアル開館後すぐから、市民(アート・コミュニケータ)との協働を始め、美術館を取り巻く社会的な課題について共に学び合いの場を持ちながら、2021年に超高齢社会に対応すべく「Creative Ageing ずっとび」を始めることができました。リニューアル開館から10年の間にできた地域のネットワークやアート・コミュニケータと共に積み重ねた経験値は新しい活動の基盤になり、1年目からさまざまなタイプのプログラムに着手することが叶いました。

この超高齢社会へ対応した美術館プログラムが世界に広がってきた潮流の背景には、日本ではあまり語られない2つのポイントがあります。それは、人権をめぐる議論、つまり「人の尊厳への意識の高まり」と「パーソンセンタード(当事者中心)」の学びやケアへの認識の深まりです。この2つは都美のアート・コミュニケーション事業全般で大切にされてきた考え方ですが、「クリエイティブ・エイジング」と呼ばれる事業においては、おそらく世界共通で前提となる考え方となっています。

人は何かを見たり聞いたりする時、自分の体に宿る記憶と結びつけて、世界を知覚します。自分の体に宿る経験値と外からの新たな情報とが、良い形で出会い繋がるとき、学びや心の充足感が増すのです。その時に重要なのが、本人の存在が肯定されていて安心した状態の中、その人に関心を寄せている他者の存在があり、共に新しい外界の情報に出会うというプロセスです。認知症の状況があるとしても、今ある状態を肯定し、また今ここで、新しい世界に誰かと一緒に出会うことは、人間らしい思考や感覚を促し、充足感をもたらします。「人間らしさ」の根源は創造性にあり、またその創造性は人の尊厳が守られた元に関われ、さらにそこで生じた創造性はその人らしさを肯定するという循環が生まれます。こうしたコミュニケーションが人々のウェルビーイング(幸福な状態)につながることで、ここ数十年の間にさまざまな研究で言及されてきました。

アートを介した創造的なコミュニケーションと、それによりもたらされるウェルビーイングが、美術館という場を介して世の中に増幅していくことに期待をしていきたいと思います。